コトノハなごや
KOTONOHA NAGOYA

開催報告
2018
REPORT

アレに乗ったカップル

中村 航

「お前の観覧車のエピソードのおかげで、俺たちその気になったんだわ。ありがとな」
結婚披露宴の最中に、新郎は言った。隣の新婦もにっこり微笑むのだが、僕にはなんのことかわからない。
僕らは三人とも名古屋出身だが、出会ったのは東京でのことだ。大学生だった僕らは、他の地方出身者にはわからないエピソードを話し、大いに盛りあがった。
まずは新郎が、寿がきやのみそ煮込うどんの話を、猛烈な勢いで語った。子供のころの土曜の昼食は、決まってみそ煮込だった。麺と卵でながらスープの素と卵を落とし、麺全体に卵を絡ませて食べる。あの大定番の袋麺が、東京ではなかなか手に入らない。東京信じれん、と彼は何度も繰り返した。
新婦のほうは、東山動植物園のボートについて熱っぽく話した。園内の池のボートにカップルで乗ると必ず別れる、という迷信は名古屋中に広まっている。
ある日、高校の女友達が、その迷信を破ろうと思いたった。付き合っていた彼氏に東山動植物園のボートに乗ろうと言ったら、俺と別れたいのか？とケンカになり、それがきっかけで別れてしまった。まだ乗ってないのに！
次に何か話すべきなのは僕だったが、二つの強力なエピソードを、先に言われてしまっていた。
「……そういえば……栄にできた観覧車、知らん？」
観覧車はできて間もなく、地元の人間でもまだ知らないと思ったのだが、そうでもなかったようだ。二人は顔を見合わせ、知っとる、と小さく頷いた。ボートの話をアレンジした出まかせを、僕は言った。
「アレに乗ったカップルは……、結婚するらしいよ」
「……へえー、そうなんや」
幸せそうな新郎新婦を見やりながら、僕はゆっくりと思いだしていった。
あのとき「へえー、そうなんや」と言った新郎は、妙にしらじらしい態度だった。
新婦のほうは、少し顔を赤くしていたような気もする。

コトノハなごや 検索
kotonohanagoya.jp
この印刷物は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

はじめに

文芸による名古屋の魅力発信事業
第２回「コトノハなごや2018」レポートをお届けします。
日常の何気ない名古屋の風景写真をもとに、
今回もたくさんの皆さんが、名古屋の魅力を見つけて
コトノハ作品を作ってくれました。
ありがとうございました。
今これを読むあなたが感じている名古屋と、
重ねて感じてみてください。
また、次回の参考にしてもらえればと、
フィールドワークとワークショップ風景も掲載しています。

コトノハなごや
KOTONOHA NAGOYA

開催報告

もくじ

2　第２回作品募集プログラム写真
5　入賞作品
10　入選作品
25　実施レポート

第２回作品募集プログラム写真

写真提供：秦 義之

1

松坂屋とタクシー

「いとう呉服店」から始まり創業400余年の超老舗「松坂屋」。南館７階には資料室があり、松坂屋と名古屋の変遷を知ることができます。ちなみに「金のタクシー（フジタクシー社）」は世界に１台だけだそうです。

2

堀川とゴンドラ

名古屋城を築城する時、資材運搬用に使われた「堀川」。川の環境再生とともに納屋橋沿いの川辺には飲食店もでき、ゴンドラやクルーズの体験も行われています。

3

名古屋市科学館と白川公園

科学館にあるプラネタリウム。ドームの大きさは35mで世界最大の大きさを備えています。緑多い白川公園には科学館のほか名古屋市美術館もあり、「芸術と科学の杜」の愛称が付いています。

4

大津通栄交差点

「名古屋のお買い物スポット」といえば必ず名前が上がる街、栄。現在街のあちこちでリニューアルが進んでいます。新しくなっていく最中の街中には、不思議な光景が瞬間的に現れることもあります。

5

大須観音

食べ歩きも楽しめる美味しい街として有名な「大須商店街」。年齢性別国籍を問わずアンダーグラウンドなものからメジャーまで様々な文化芸術が詰まっている街で、その賑わいを見守るかのように「大須観音」があります。

6

名鉄電車

名古屋鉄道株式会社、通称「名鉄」として親しまれる鉄道です。車両の赤色は通称「名鉄スカーレット」と呼ばれているそうです。

7

名古屋港水族館

東海圏に住んでいる方なら聞いたこと・行ったことのある通称「名港(めいこう)水族館」は、広さが日本最大級。シロイルカやシャチ、コウテイペンギンなど飼育の難しい海洋生物の研究でも注目を集めています。

8

名古屋高速 / 都市高速道路

名古屋は車の多さも特徴のひとつで、自動車産業関連の会社も市内にたくさんあります。名古屋港からの輸出量の半分ほどは自動車で、日本一の輸出台数となっています。（出典：平成27年度財務省貿易統計）

9

名古屋三越栄店屋上遊園

現在リニューアル中の屋上遊園（2019年2月オープン）。ひと際目を引く観覧車（乗車はできません）は1956年に設置、現存する屋上観覧車として国内最古のものです。2007年には登録有形文化財に登録されています。

10

セントラルパーク / ギャラリー

地下鉄栄駅と久屋大通駅を結ぶ地下街「セントラルパーク」。「セントラルギャラリー」は久屋大通駅改札すぐの壁面で、写真や絵画、オブジェや詩など芸術全般の展示が行われており、通りすがりにアート鑑賞ができます。

選考委員コメント

中村 航

今回面白い作品が多く、甲乙つけがたいところもあった。そのなかでもちょっとした差、文章をどれだけ人に読んでもらうかということを考えて、それが１行２行とかに表れたものを選んだと思います。全体に面白かったです。すごく短い文章の中に、その人の感性やその人の人生が垣間見えるような作品にすごくグッときて、本当に短いのにその中にその人のキャラクターも、長い人生の深みとか考えていることが伝わってくる作品がいくつかあって、そういったものがいい評価を得ていたように思えます。

吉川トリコ

２回目の「コトノハなごや」、去年に比べて全体のレベルが上がっていて読んでいてすごく楽しかったです。バリエーションも増えていて、ワンアイディアで押し切るものだったりとか、もうちょっと情緒的な日常の描写を重ねていくものだとか、色々なものがあってすごくよかったなと思います。１点気になったのが「時制」が、短い中でコロコロ変わるというのが結構多かったので、もし来年チャレンジされるのであれば、「ワンシチュエーション・ワンタイム」でいくようなものが読みたいなと思います。

武田 俊

今回が２年目で、視点としても昨年のことを思い出しながら選ばせてもらいました。作品数もすごく増えているなかで、作品のバリエーションも豊かな作品が今回出揃ったのではないかなと思います。想像よりも作品の傾向がさまざまだったので、審査員のなかでも意見の割れる部分もあったのですが、最終的には名古屋らしさをうまく表現できているとか、名古屋の魅力だったり特徴を捉えている作品、その中でも「コトノハなごや」の文芸賞の特徴でもある、写真を選んで書くという視点で、写真のイメージをどういうふうに活かして書かれているかというところで、みんなで議論を深めていけたのではないかと思っています。

ことのはなごや

入賞作品

KOTONOHA
NAGOYA

金賞

懺悔

チョコラブ

あなたに謝りたいことがあります。
私は物事を先伸ばしにするのはよくないと教わりました。
他力本願はよくないと教わりました。
口先だけで行動しないのもよくないと教わりました。

私は今まで大変失礼なことをしてしまっていたと、気づきました。
この場を借りて心よりお詫び申し上げます。

手を合わせて頭を下げればよいということではないことも重々承知しています。

大須観音様

本来ならこちらがお供えをすべきところ、
いつも唐揚げや、アイスクリームや、みたらし団子や、たこ焼きを食べてからしかお参りに行っておらず、申し訳ございません。
パソコンや、携帯カバーや、服など、自分の欲望を優先し、
後回しにしてしまったこと、心よりお詫び申し上げます。

しかしながら、それでも、またお参りに来ますので
何卒(なにとぞ)ご利益(りやく)をいただけませんでしょうか。
次からは2回に1回、上前津駅で降りるのをやめて、
大須観音駅で降りるようにし、真っ先に足を運ぶようにします。
どんなにいい匂いが漂ってこようとも、欲望に抗(あらが)います。

ですので、何卒ご利益、ご縁を頂きたく存じます。
何卒何卒よろしくお願い申し上げます。

銀賞

セントラルばあちゃん

水野大雅

「真ん中の赤いクマのとこ見やあせ」
突然かかってきたかと思えば、訳がわからないこと一方的に言われた電話。「やっとかめ」とか「なも」なんてコアな名古屋弁を捲(まく)し立てられ、一方的に切られた電話。電話の主と同居している伯母に「翻訳」してもらって、辛うじて通じた。
「え～？ なんで俺がばあちゃんのハイク見なあかんの？」
「どうせ大学生だから、ヒマでしょ」という、これまた遺伝子が見事に引き継がれた伯母の言葉。祖母の家は今でも名古屋の由緒正しい下町に住み続けているのと対照的に、彼の両親は一戸建てを買うために、泣く泣く名古屋市内から市外に”落ちのびた”。そんな辺縁に住む俺に頼むなよ。と思っていながらも、ぶつぶつ言って、カノジョとのデートにかこつけて見てやることに。カノジョはもちろん、名古屋市内。住所が○○区から始まる人だ。

「へえ、随分(ずいぶん)と流麗(りゅうれい)な字なのね。」
真ん中の赤いクマ(翻訳「セントラルパークのギャラリー」)に展示していた祖母の俳画を二人で見ると、意外にもカノジョは関心を示してくれた。こっちは全く関心がない。せいぜい読めた句が〈炎天や名古屋弁なる婆三人〉という、読まなきゃよかったと思わせる句だった。
セントラルパークに、セントラルブリッジ。そのど真ん中にテレビ塔が鎮座。そういや鉄道会社の名前も日本語名は東海なのに、英語に直すとセントラルだったっけ。そう思うと、そんな”セントラル”大好きな名古屋の、そんな場所にあのばあちゃんの展示は、実にお似合いではないか。思わずプッと吹きだした彼に、彼女が言う。
「ねえ、住んでいる所って不便でしょ。」
「まあね……。でもさあ、親が建ててまったし…」
「私と結婚したら、名古屋市内に戻れるよ。パパの家に一緒に住めばいいから！」
嗚呼、俺は一生、セントラルな女に振り回されるらしい。

銀賞

ねがいごと

麻原奈未

名鉄電車で花火を見に行った帰り道、3歳年下の彼がポツリと言った。二人の通勤にも便利だし、熱田さん近いからお参りもすぐ行けるよ。あ、あとEってラーメン屋が駅の近くにあってさ、超こってりなんだけど美味いんだよ。それにさ、たたんたたんって、聞こえるよ。こないだ言ってたでしょ？　電車の音が聞こえる生活っていいねって。どうかな。
ポツリがきっかけになったのか、彼は捲(まく)したてるようにここまで言って、眼鏡を中指で触った。恥ずかしい時の彼の癖。些細(ささい)な会話を覚えててくれたことが、嬉しかった。
秋の終わり、二人での生活が始まった。休みの合わない私たちは、二人で過ごす時間はあまりなかったけど、近くのスーパーで玉葱が1袋79円で買えたことをスタンディングオベーション並みに賞賛したり、彼が失敗した料理を笑いながら食べたりした。
初めての年越しは、熱田神宮で初詣をして、そのままEで年越しラーメンしようという話になった。人混みに酔った私はラーメンなんか食えるかと思っていたのに、いざラーメンと餃子がテーブルに並ぶと、パキリと割り箸を割っていただきますと手を合わせていた。
フーフーとラーメンを冷ましつつ、何お願いした？と聞こうと顔を上げたら、ラーメンの湯気で彼の眼鏡が真っ白になってて、思わず吹き出した。きょとんとした顔をしている彼を見て、まぁ今はいっかと餃子を一つぱくつく。Eのラーメンのこってりドロドロスープはなかなか冷めない。猫舌の私が少しずつ食べ始めた頃には、彼は既に食べ終わって眼鏡を拭いていた。鼻先が赤くなった彼は、田舎の子供みたいだった。

初詣ダイヤなのか、遠くで電車のたたんたたんという音が聞こえる。ふとさっきの質問を思い出し、ねぇ何お願いした？　と改めて聞いたら、え、いや、ちょっとしたことを、と言って、さっき拭いた眼鏡をもう一度拭いていた。

佳作

水槽の向こう側に彼女

shutorumu

「さあ、何か質問のある子はいるかな？」
水槽のアクリルの向こう側から、ダイバーの声がマイクを通して聞こえてくる。
たくさんの魚達に囲まれて泳ぐダイバーは、とても気持ち良さそうにみえた。
「ねえ、そろそろ次いこっか」
「そうだね、進もうか」
彼女とは、大学に入った頃からの付き合いだ。

勉強を頑張る君。
レポートに悲鳴をあげる君。
テストの結果に一喜一憂する君。
美味しい料理に満足気な君。
初めての彼氏が出来たと、嬉しそうに語る君。
そして、彼氏とうまくいっていないと、少し悲しげな表情を見せる君。

そんな君を元気づけようと、水族館に誘った僕。
彼女の相談に乗るなんてただの口実だ。
惹(ひ)かれていく自分には、とっくに気がついている。
でも、きっとこれからもこの距離が近づくことは無いのだろう。
君が嬉しそうに彼の話をする度に、僕達の間にある透明なアクリルの壁が厚くなっていく。

卒業し水族館に就職してから、数年が経った。
心地よい水の冷たさが体を包む。
周りを泳ぐ色とりどりの魚達、マイクを通して子供達に話しかける。
「さあ、何か質問のある子はいるかな？」
水槽のアクリルの向こう側に、面影がある少女がいた。
彼女の幸せが、僕に笑いかける。

佳作

ウォーカラウンド・アンダーグラウンド

水瀬朱々

階段を駆ける葉っぱとすれ違いそよぐ空気を体で受ける
あかんって声でしゃきっと目を覚まし跳ねる足先と電車の床
何もかもから守るからあなたたちは過ぎるこのシェルターの光を
ハローいま目が合ったねと笑い合うわかっているぞそこのたい焼き
かわいい階段が後ろへ流されて行くよ次はどこへ行こうか
びしょびしょに濡れて磨かれた石の上を滑らすぼくの靴底
何事もスィンクトゥワイスないままでハウメニータイムズナナちゃん
この階段の上にできたらしい菓子屋の匂いがまず胃へ降りる
金時計の下だからねと言う声を耳に当てると確率五倍
もうきみでないみたいだと真剣に話すモーニングは華麗なり
足早に進むスーツの波を0と1に切り替える蛍光灯
フィクションの淡いやさしさ期待して担々麺大盛りでください
赤ら顔さらした帰り道にいる赤いクマやらパンダがニコリ
バーガーを押しつぶす手が語り出すB級映画のそのあとのこと
雨がきて静かにひらく神さまもう見たくないですと祈りの傘は
周囲から／斜め／横／上／切り出してみせたこれは辻占(つじうら)でない
二卵性双子のような顔をして母娘みたいで友達と言う
ひかひかと光る看板が指し示すまだ見たことがない軒先
誰であれ好きにならないきみという安全圏で食べたカレーだ
雨傘みたいな日傘を差す日から曇り模様の傘が飛び去る
果実をすりつぶす音に閉じ込めたブースから受け取る栄養過多
安心よだってそこらに靴屋があるしヒールでも走ればええが
水面が降り注ぐ広場にて語り合う怪獣と宇宙船たち
透明な箱に並んだ服を通り過ぎああもう海へ行きたい
八角のクリスタルに乱反射する挨拶相槌(あいづち)あとはどうする？
排水溝ふさぐ風船ゆうらりと揺れて脇から猫が抜ける
ちゃんと地下歩いて来てよ繋がってるってほら暑さがヤバいしさ
突き抜ける声がぐわんと置いていく法定速度のエスカレーター
全き日めぐる足たちわたしたち遠くへ来たねと笑うそれから

入選

遠距離親子のお買い物

伊藤美智子

「お母さんは、みっちゃんをここで産んだんだでね」
母は大須の成田病院の前を通ると自慢気にいつもそういった。私と母はよく車で大須商店街に買い物へ行く。私は大須観音のハトに餌をあげるのが好きだった。餌を持っているとたくさんのハトが集まってきて、ちょっぴり怖いけど人気者になれた気がした。餌をやり終わって汚れた手を洗うのは、階段の下にある蛇口。水を出すひねりが硬くて母がいつも出してくれていたのを覚えている。
商店街の入り口に母のお気に入りの古着屋がある。でも、私は興味がない。古着の独特のにおいも嫌い。いつも外で待たされてばかりでつまらない。近くでソーダアイスを買ってもらってベンチで座って持っていても、すぐに食べ終わる。母を待つのは果てしなく長い。やっと店から出てくると持っているのは小さい袋。「お母さん買ったのそれだけ～？」というと、母はニコッとして次の店に向かう。
日が暮れると来た道を戻る。店のシャッターはほとんどしまっていて、人も少なくどこか怖い。母の腕をつかんでくっついて歩く。
大学1年生になっても母との買い物は続いていた。お互いに別行動をすることが多くなったが、気になる服を見つけると集合してアドバイスし合うものの趣味が合わない。母には「一緒に買い物してもつまらない」といわれることが多かった割には、結構な頻度で一緒に大須へ買い物に行っていた。
「…もうこれでみっちゃんとここに来れるのも最後かもしれんね」
冗談のようなことを言う母の頬はこけて、ウィッグがずれている。私はその日もいつも通りに楽しんだが、いつもと違うのは母の歩くペースだった。

大学3年生の春、SNSで見つけたずっと行ってみたかった店が大須にあったので一人で行くことにした。やっと見つけた店の名前の看板と、その横には私が子供の頃によくアイスをこぼしたベンチがあった。

入選

『呟く』声は、届きますか？

湘南野武士

平日の朝、大津通の百貨店松坂屋前に車を停めてラジオを聴く。それが『大金 亮』の日課だ。
5:30会社を出発した彼は、すぐに若い女性を乗せた。「栄の松坂屋までお願いします。」
「は、はい！」緊張で声が裏返った。暫(しばら)くして…「お仕事、始めたばかりなんですか？」「え？ あっ、はい。実は今日が初日で、お客様が第一号さんなんです。」「え～！ そうなんですか!? ビックリ！ 実は… 私、7:00からのラジオDJしてるんですが…今日のオープニングトークで話ちゃおうかなぁ～（笑）」「えっ？」「良かったらFMC聴いて下さい！ あっ！ ここで大丈夫です！」彼女が降りた後も、ラジオの事が気になり、彼は車を動かす事が出来なかった。
7:00『RIN RIN MORNING!』彼女のタイトルコールがラジオから流れた！ そして…「聴いて下さい！ 今朝、少し寝坊しちゃったので、タクシーで来たんですが…」うわぁー！「えっ？ 金持ち？ 違いますよぉ～池ちゃん揶揄(からか)わないで～！ そのタクシーの運転手さんが、実は今日が仕事の初日で、私がお客さん第一号だったんですよ～！ ねぇ池ちゃん、凄くない？」なんか…嬉しい「それで、その運転手さんに番組の宣伝もしちゃった！（笑） えーと…今朝の運転手さん聴いてます～？」き、聴いてますよ！「もし、良かったらツイッターで番組もフォローして、色々呟(つぶや)いて下さい！」ツ、ツイッター？ 呟く？「はい！ それでは、今朝も9時までの2時間は、私『大金 凛』に、お付き合い宜しくお願いしま～す！」えっ？ 彼は、焦った。離婚してから20年間会っていない、娘と同姓同名なのだから…。
いつもと同じ時間、松坂屋の前でラジオを聴くのが、彼の日課だ。手には買ったばかりのスマホ。
「これは…『初心者タクシードライバー』さんからですね！ え～ウソ！ 池ちゃん、見て～味噌煮込みうどんの上に、エビフライと手羽先がトッピングされてる～（笑）」

入選

大須の骨董市

石川知子

18日と28日は骨董市、それが目当てで大須観音へ行く。線香の香りや、本殿で参拝する人を横目に見ながら、境内を埋め尽くすテント張りの店を巡り歩く。種々雑多な品が地面に並べられたにわか仕立ての店だが常連客もあり　店主以上の商品知識でうんちくを傾けたりしている。

私の大須通いは40代から始まって、50代、60代、70代とよくもまあ出かけたものだ。興味は年代によってかわりもしたが、主に日本の古人形が目当てだった。人形は愛玩物だから手足の取れたのや顔の汚れたのなんかは店主にもぞんざいに扱われている。でもそんな中に掘り出し物がある。

昭和前期の女の子の遊びはままごと。人形をおんぶしお母さんになったつもりで子守歌を歌ったものだ。おもちゃ屋の店先には人形が並び、人形作りは男の仕事、たくさんの人形職人がいた。しかし彼らは戦時中次々に戦場に駆り出され、帰らぬ者も多く、職人技の人形は戦後姿を消した。今は大量生産のソフビ人形にとってかわられている。

今はもう望めないそんな手作りの人形が骨董市にたまに出てくる。買い取る時点でそれらはすでにあちこち損なわれ、色あせたりしていたが、それ以上は劣化することなく我が家の押し入れの中でじっと時を過ごしてきた。

たまたま買った、満州の日本人家族のセピア色の写真なども、今になってみると結構意味あるもののように思える。

骨董市で見つけて連れてくるってことは、貴重なものを次代に引き継いでいくため一時(いっとき)預かって保護者になるということなのだろう。

観音様に参拝するでもない大須参りだけれど、ここでこれからも人と物言わぬモノたちの様々な交歓があり続けることだろう。

入選

世紀末のクリスマス

家城武尚

『あーあーあーあー。落ち着かないし落ち着けない。クソー。なんで必死に動くのさ、そんなに血液送っても、俺の恋は変わらねえ。変わらねえぜ、バカヤロウ。』

世間が二千年問題に夢中になっている時、私がノートに記した詩である。ごんべんに寺と書いて詩である。

初めての彼女、初めてのクリスマス、初めてのプレゼント、初めての三役が揃い踏みしたのだから、温かい目で見てあげたいと思う。

当時、恋人へのプレゼントと言えばオープンハートと相場は決まっていた。ブランド物なら栄だと、クリスマス当日に地下鉄で向かった。当日準備という事もあらかじめ予定していた。恋人と一緒に購入するという理由からではない、貴金属の鮮度を考えての事だ。なぜなら、購入してから、安アパートの汚い部屋に持ち帰ると、なんだか劣化してしまうのだ。

栄に着いた後に、道行くタバコを吸っているおっさんに尋ねると、道順を教えてくれた。「でかい時計を持ったおっさんが目印」と言われ、「おっさん、おっさん」と口ずさみながら歩いて行くと、本当に時計を持ったおっさんが入り口の上に立っていた。半信半疑だった自分はちょっと感動した。

店の前にはドアマンがいて厳重な感じがした。初めて入るには勇気がいって、一度は通り過ぎたほどだ。店に入ると、クリスマスだというのに混雑しておらず、店員さんの方が多いくらいだった。すぐに一番大きいオープンハートのネックレスをお願いした。

それから18年後、タバコを吸うおっさんも、でかい時計を持つおっさんも、オープンハートをあげた彼女もいなくなった。それでも栄は栄である。もちろん寂しいという気持ちはあるのだが、あってなくなってきた街の変化を体験してきた事、それを語れる自分がちょっぴり誇らしい事。名古屋生まれ名古屋育ちの私が、この頃ようやく、名古屋人になってきた。そんな気がした。

入選

母へのプレゼント

梅澤かずえ

私は横目で、隣に座っている母の顔を見た。タクシーに乗り込んだ時の戸惑いの表情はすっかり消えていた。母は体を窓に近づけて興味深そうに栄の街を眺めていた。
「ああ、懐かしいわ。松坂屋デパート」はずんだ声が聞こえた。

父が亡くなったのは今年の1月だった。それから月に一度、私は母の様子を見に三重県の生家を訪れている。母は毎回私の来訪をとても喜び、いつも笑顔でもてなしてくれた。ところが先月行った時は、様子が違っていた。声に元気が無く笑顔も途絶えがちだった。
「お母さん、何か困ったことでもあるんじゃない？」
「来月は結婚して50年目になるの。去年お父さんと旅行に行こうって約束していたんだけど。」
目をそらせ、小さな声で答える母。こんな寂しそうな母の姿を見たのは初めてだった。

その日から「何とか母を喜ばせてあげたい」と考えてはみたが、良い案は浮かばなかった。

50年目の記念日まで後1週間と迫った日、私は仕事で久しぶりに栄に来ていた。その帰り道のことだった。交差点で信号待ちをしていた私の目の前を一台の金色のタクシーが通り過ぎた。
「これだ！」

私は家に戻るとすぐ母に電話した。
「お母さん、今度の日曜日に名古屋見物をしよう」

私達は名古屋駅で待ち合わせた。
「お母さん今日は金婚の日のお祝いにちなんで、金色のタクシーにこれから乗るよ。名古屋に一台しかない縁起の良いタクシーなんだよ」
驚き、恥ずかしがる母を乗せてタクシーは出発した。
「まず初めに、金鯱の名古屋城を見て、それから復元されたばかりの本丸御殿を見学しよう。お昼ご飯は、すぐ近くの金シャチ横丁で名古屋名物を食べよう。お土産も売っているよ」

話を聞き終わった母は、にこにこしながら、
「ありがとう。色々考えてくれて。お父さんもきっと喜んでいるわ」と言うと、父の写真をバッグから出してタクシーの窓の方に写真を向けた。

入選

まちなかラビリンス

邑久名

大須商店街は、迷宮だ。不思議の町だ。
碁盤（ごばん）の目の様に、整然と交差した通りしかないはずなのに、一度足を踏み入れたら、もう抜け出せない。目の前に次々と現れるわくわくに魅入られてしまうのだ。和と洋、昔と今が混在するこの町は、まるで外とは違う世界に飛び込んでしまったかのようだ。
異国の雰囲気漂う雑貨屋や、ちょっと薄暗い古着屋をいくつも通りすぎて、唐揚げやら饅頭（まんじゅう）やらの揚げたての油の匂いに吸い寄せられる。色とりどりに並んだガチャガチャを回して、路地裏の靴屋をふむふむと覗き、軒先に吊るされたジーンズを横目に鯛焼きを頬張りながら、さあ、観音様はどちらだろう。そうしてふらふらと歩いていれば、だんだん自分がどこにいるのかわからなくなって、ここは、と曲がってみた先には万松寺の赤い提灯が揺れている。
おかしい。イタリアンの店の前も、ラーメン屋の前ももう通ったし、あのメイドカフェの看板を見るのは何度目だろう。迷って迷って、だけども、全然怖くない。気分はさながら冒険で、まるでウサギを追いかけるアリスのようだ。そういえば、そんなお店もあったっけ。チェシャ猫の代わりのように私を見下ろす大きな招き猫とだって、胸を張ってもう立派な顔見知りだ。
そろそろ帰らなきゃ。左手の紙袋は、おみやげでいっぱいだ。だけども、まだまだ帰りたくない。まだまださまよっていたい。
ほらね、やっぱりここは迷宮だ。不思議の町だ。一度足を踏み入れたら、簡単には抜け出せやしないのだ。

入選

宇宙 日本 名古屋

麻葉

「名古屋蒸し暑いっしょ。在宅ワークなんだし、こっちで一緒に暮らせばいいじゃん」
例年にない猛暑にばてていた私には、悠人の言葉は少々上から目線に感じた。
「東京だって変わらんでしょ。人多いで余計暑苦しいわ。それに…」
「名古屋には日本一のプラネタリウムがある。だろ？」

科学館の改築工事をしている頃、私は丁度近くの会社に勤めていて、ビルの間からのぞく巨大な球体にすぐに魅了された。
悠人とも一度、プラネタリウムに一緒に行ったことがある。
解説の癒しボイスに快適なシートと星空、まんまといびきをかき始めた彼を愛しく思った。
悠人が転勤し空いてしまった時間も、私は足繁く通った。
家族連れも多く、並んでいる時から寂しさを感じる。でも果てない宇宙に対する一人ぼっちでちっぽけな自分、それを感じることは妙に心地よいのだ。
遠距離恋愛の隙間を埋めるツールだったはずが、その恋愛と天秤にかける程の存在になっていったというのは流石に言い過ぎかもしれないが。

「東京には日本一がいっぱいあるぞ」
悠人はミーハーな私を誘惑する。
「悠人。名古屋のプラネタリウムのドームの大きさは世界一だから」
悠人の溜息が聞こえた。
「もういいよ舞。別れようぜ」
「えっ！」
「だってこっち来たくないんでしょ？」
「行きたくないっていうか、その、ちょっと不安だし」
突然の別れという言葉に、私は焦ってしどろもどろになった。
「なあ。舞の言う通り東京だってそんな変わんないよ。宇宙目線で見れば東京と名古屋なんて超ご近所だろ。大丈夫だよ」
近所ならこのままでもいいじゃんという屁理屈は飲み込んだ。名古屋は離れてもなくならないが、悠人のことはいつだって失う可能性があるのだ。
「それもそうだね。来たいと思えばすぐ来られるわね」
「そうだよ。プラネタリウムで何学んでんだよ」
頭を軽くこづくときの優しい言い方だ。
不意に悠人に会いに駆け出したくなった。

入選

色のない都市

畔柳仁志

私はこの都市が嫌いだ。
朝起きて黒色の珈琲を飲み、灰色のスプーンとフォークを使ってサラダを食べ、私のお気に入りの茶色の靴や灰色の帽子を被り、毎日の日課である散歩に出かける。
今までであればこの時間帯なら会社に向かう社会人達で混み合っていただろうが情報技術が進んだ現代では誰もが自宅で仕事をすることが出来る為、今歩いているのは私のような暇を持て余している人ぐらいなのだが、今では暇を潰すためには自宅でネットをつなげるだけでいいので外に出る必要は無いので、私の周りには人がいない。
この都市の建物は全て白色であり、一見すると統一感のある都市のように見えるが私はそうは思えない。仕事も遊びもすべて自宅で出来るこの時代だからこそ建物の外見などあってないようなものだし、わざわざ見る人がいないのに色を付ける必要がないのも私にはわかる。
しかし料理も彩りが大事なのと同じように、見る人がほとんどいなくても色が欲しいと思ってしまうのは私だけだろうか、木材の茶色でいい、瓦の黒でいい、鉄の灰色でもいい、色のない建物のなんとつまらないことか。
もう一度言う、私はこの都市が嫌いだ。

入選

空飛ぶイルカ

丸山智己

「私ね、子供の頃イルカは空を飛んでるって信じてたんだ」
名古屋の水族館でふいに出た彼女の言葉。僕は馬鹿らしく思い、なんだよそれ、と適当に返してみたが、彼女の目は真剣だった。
「だってこんなに気持ちよさそうに泳いでるんだもん」
彼女は少し興奮した様子で話す。確かに気持ちよさそうに泳いでるように見えるかもしれない。だが、こんな狭い水槽に入れられたのであっては、イルカもたまったものではないのだろうと考える。
「今でもね、あ、空飛んでる！って思うことあるよ」
楽しげに話す彼女の目は子供のようにキラキラ輝いていた。
子どもの頃持っていたはずの空想力とそれに踊らせる心。そういうものを、僕はどこかに置いてきてしまったのかもしれない。

入選

甲府で出会った堀川

柴田哲也

生まれ育った街だったが、名古屋だけで終わりたくなかった。
高校三年の時には、親に無理をいって県外の大学だけをうけた。関西に四年間、その後全国企業の東京本社配属となった。名古屋は単なる帰省先となった。
当時、私は若さにまかせて深夜まで働いた。それでもうまくいかない顧客もあった。
甲府にあるA産業の鬼頭という担当者はまともに話もしてくれなかった。五十歳すぎの主任だった。何とか面談にこぎつけた日、なにげなく「このビルの入口の絵は松重閘門（まつしげこうもん）ですね」と話題をふってみた。玄関に200号位の油絵の大作が飾ってあった。その瞬間、表情が変わり「よく知ってるね。名古屋の人なのかな？」と先方から話をしてきた。いわく堀川は名古屋城築城時に木曽ヒノキを運搬するために作られたとか、中川運河は昭和の最初の頃に完成して、松重閘門が最後に開いたのは昭和43年だったとか。
その日は今まで10回以上話をしてきた倍以上の会話ができた。私も堀川の浄化とか、ゴンドラを使った観光事業とかの知りうる限りの最近の事情を話した。鬼頭さんは名古屋出身だが今では親戚もいないらしい。同じ小学校の先輩であることもわかった。
もちろん、個人的に近しくなったからといって仕事がすぐに決まるわけではない。けれど、その後も相互に情報をやりとりすることができ、半年後に初めて成約にこぎつけた。
これは10年以上前の話だ。その後も良好な関係は続き、今では甲府に行って鬼頭さんの「まあちっとまけてまわな」とわざとらしい名古屋言葉を聞くのが楽しみになっている。
名古屋出身が少し誇らしく思えるようになった。

入選

大きな魚

Seeker

「わぁ、大きいね。魚」
4歳になる少女がイルカを前に手を伸ばしてはしゃいでいる。
「イルカは魚じゃなくて哺乳類だよ」と言いかけ、すんでのところで留めた。僕はこのセリフを言ったことがある。
そうだ、あれは20年近く前。

僕には家族ぐるみの幼なじみがいた。僕は少しませた子どもで彼女の事が好きで片想いだった。
そんなある日、彼女の家族とこの名古屋港水族館に行ったのだ。僕の家は水族館からさほど離れてはいないのだが両親が共働きだった為、僕はここへ来るのが初めてだった。
意識していない彼女は僕の手を掴みずんずん奥へ進む。
「この魚綺麗！」彼女が時折感動の声をあげるが僕は魚どころじゃない。
気付けば僕らは広くて薄暗い空間にいた。どこをどう進んだかも分からない。
きっと彼女は道など覚えていない。急に彼女の事でいっぱいだった頭が冷め始め焦燥に変わる。両親はついて来ていない？ どっちから来た？ 今はどこだ？
「わぁ、大きい魚！」
ふと彼女の声に目の前の水槽を見上げた。そこには僕を嘲笑うかの様に悠々と泳ぐイルカが2匹。
「イルカは魚じゃなくて哺乳類だよ」
つい強い口調で彼女に当たってしまった。
彼女はこちらをきょとんとした顔で見ると次の瞬間大声で泣き出した。
少しして彼女の両親が見つけてくれて事なきを得たが、その日彼女が口を聞いてくれる事は無かった。

あぁ、思い出した。
危ない危ない、また泣かせるところだったかもしれない。
想い出から現実に戻ると少女の横に先程までいなかった20代半ばの女性が立っている。
「あ、ママ！ 見て！ 大きい魚！」
「あらほんと、大きな魚ね」
4歳になる娘を抱き上げてこちらに寄ってきた彼女はいたずらっぽく笑った。
「あの時みたいに『イルカは魚じゃなくて哺乳類だよ』って揚げ足をとらないの？」

入選

黒白

R

一瞬空が暗くなった。実際暗くなったと言うより、黒くなった。奴らは群れをなし、大須の空をきたないモザイクで支配する。かと思えば一瞬にして飛来し、境内の白を一瞬にして黒に返す。真ん中から占領する所を見る限り、オセロを楽しんでいるわけでは無いらしい。おもむろに、小銭を握った少女が餌売り場に走ってくる。一方奴らは横目でそれを眺め、隠しきれない期待を持って少女に距離を詰める。その見た目とは裏腹に、案外ツンデレなのだ。少女が小銭を餌に変えると、奴らは期待に応えてくれた少女に対して歓迎のダンスで舞う。あっという間に、少女はカラスに包まれ、一体化してしまった。しばらくすると、真っ黒な塊は再び舞い上がり、去って行った。真っ白な落し物だけ、少女の肩に残して。

入選

不気味な噂

杉山翔悟

「ここのあたり夜になると出るらしいよ」
栄の松坂屋の前の交差点で夜になると、運転席に誰も乗っていないのに動いているタクシーが出るという噂があった。昼にその話を友人と話しながらそこの近くを通りがかっていた。しかし、僕自身見たこともなかったし、ネットにもこれといった情報はなかったのでよくある噂が独り歩きしたありもしない都市伝説なんだと思い、特に何も思わずその場所を通り過ぎた。
ゲームセンターやカラオケで遊び、すっかり日も落ちた深夜1時半。噂の事などとっくに忘れていた。そろそろ帰ろうかと駅に向かうととっくに終電が行ってしまった後だった。家が近い友人は、歩いて帰り、残った僕と友人一人は仕方なくタクシーを使い最寄りの駅まで帰ることにした。松坂屋の前で歩いて帰る友人と別れ、僕たちはその場でタクシーを待つことにした。しかし、いつまで待ってもタクシーはおろか普通車も走っていない。周りを見渡すと歩行者すら一人もいない状態だった。不思議に思っていた所に、ようやく一台のタクシーが来た。目の前に止まってもらい、乗り込みながら、
「すいません。○○駅までお願いします。」
といい、乗り込んだのだが、返事がないままドアが閉まり発車してしまった。変だなと思いつつ乗っている
と、見たことのある風景が窓から見えた。松坂屋だった。流石に不信になり、運転席を見ると、誰も乗っていなかった。この時、あの噂を思い出したと同時に、窓に沢山の手形が浮かび上がり、運転席に白い影が出てきて、
「あちらの世界へご案内します」
こう言われた瞬間、思いっきり叫んだ。
気が付くと僕は自室のベッドで横たわっていた。
夢なんだと安心しながらも、この事を一緒に乗っていた友人に話すと、同じ夢を見たという。本当に何だったのか分からないが、もう夜にあの交差点を使うことはないだろう。

入選

屋上遊園地

山﨑智子

名古屋には昭和がたくさん残っている。その一つがデパートの屋上遊園地だ。
大人になった今でも、遊びたい気持ちでいっぱいだ。硬貨を入れて前後に動く乗り物は、さすがに子供用サイズなので、座ると窮屈（きゅうくつ）なのが悲しい。そばにいる子供たちがうらやましい。子供に戻って、一緒になって遊びたい瞬間だ。
子供でなくても楽しめるのは観覧車だ。しかし、観覧車に乗ると、なぜかどこも1回で終わりだ。ちょうどいい回数なのか。それとも、美味しい物を食べた後に「あともう少し食べたい」という気持ちに似たような「あともう一回周りたい」という気持ちが却っていいのかもしれない。
観覧車には小さい頃から今まで多くの思い出が詰まっている。
最近では、名古屋に来る前、夫が観覧車に乗ろうと言ったので、いつだったか一緒に乗ったことがある。
「楽しいね。楽しいね」
とにこにこしている割には引きつっていて、「下を見るのが恐い」
と一言。彼は高い所が恐いことを思い出した。本人はどうやら初めて乗ったらしい。
それでもチャレンジ精神が旺盛な夫は、いつか建物の横に着いている観覧車に乗ってみたいと言っている。果たして、いつ乗れるのだろうか。
名古屋に来た当初、いや今でも毎回見るたびに目を引く。通るたびに夫は言っているが、住んで半年近く経った今でもまだ果たされていない。乗れるのはいつのことやらと、一人で通るたびに観覧車を仰ぎ見る私だった。

入選

海の世界案内人

わさび

「海の世界だ…」
両親と初めて行った名古屋港水族館。
電車を降りてから水族館までの道のりが長い。のんびり歩く両親を待ちきれず先を行く。
やっと到着し、いざ中へ、目の前には青くキラキラした水槽が広がる。
海の世界に迷い込んでしまったようだ。
イルカショーでは両親の制止も聞かず前方の席へ。
イルカの飛沫（ひまつ）で案の定ずぶ濡れになった。
「言わんこっちゃ無い」と笑いながらタオルで濡れた顔を拭いてくれ、着替えの服を渡された。
楽しく歩いていたら一変、薄暗い館内に突如（とつじょ）潜水服の人形が現れた。お化け屋敷にでもなってしまったようで肝を冷やした。
館内全てを見終わりお土産コーナーへ行く。可愛い海の生き物達に感化された私には魅力的なモノばかりだ。私はペンギンのぬいぐるみをねだる。
楽しかった世界とはお別れ、後ろ髪を引かれつつも退館した。
外は来た時とは一変しキラキラとイルミネーションが光っていた。
今日あった思い出を両親に話していたら遠く感じた駅までの道のりがとても近くに感じた。
暗くなってイルミネーションで照らされる両親の表情はとても柔らかく暖かく感じた。

「ママ早く！」
いつの間にか先を行く子供が私を呼ぶ。
これからは私が海の世界を案内する役だ。
入場した途端、目をキラキラさせる。
イルカの水槽にべったりして離れない。
イルカショーでは最前列へ。もちろん着替えやタオルは用意している。
あいも変わらず不気味な潜水服の人形。
お土産コーナーは親にとったら大変だ。どこの子もお土産をねだる。うちの子はイルカが欲しいらしい。
年齢も世の中も変わって行くのに変わらない風景がここにはある。

帰り道楽しそうに今日の出来事を話す子供。
私が楽しかったように、この街に楽しかった幸せのパーツをたくさん残してあげるのが私なりの愛情だ。
今度はどこへ行こうか。そんなことを考えながら電車に揺られた。

実施レポート

KOTONOHA NAGOYA

7月フィールドワーク

講師は写真家の秦義之さん。今年は円頓寺商店街と四間道をエリアにして撮影散策。猛暑のなか、皆さんものすごい集中力でシャッターチャンスやエリアを探られていました。講評トークは歴史ある商家・四間道「伊藤家住宅」にて行いました。

伊藤家住宅

8月ワークショップ

講師は作家の広小路尚祈さん。文化のみち二葉館見学後、橦木館にて講義を実施。広小路さんから「取材」「推敲」「校正」など執筆以外の創作過程の重要さを学び、皆さんが持参された作品への個別相談も実施しました。

文化のみち二葉館

文化のみち橦木館

一次選考

文芸創作を体系的に学ばれている創造表現学部学生有志の方々（愛知淑徳大学）による下読み会。講義時間外にチームごとに都合をつけ、討論してもらいました。

最終選考

選考委員3名による入賞作選考を行いました。この様子は動画撮影し、公式ウェブサイトで公開しています。

パネル企画展

昨年度入賞作品と吉川トリコさんの基調文、本年度の中村航さんの基調文をパネル化。紀伊國屋書店プライムツリー赤池店様、ジュンク堂書店ロフト名古屋店様、ナディアパーク文化情報ひろば、文化のみち二葉館にて展示し、来店・来場の方々に読んでもらいました。

コトノハなごやサロン

当日まで公表していなかった入賞5作品を発表しプロジェクションにて投影。その都度会場から歓声や驚きの声があがりました。その後、河村たかし名古屋市長による表彰式、選考委員による講評と入選作品応募者を交えたトークを行いました。受付ではパネル企画展も実施しました。

開催概要

事業名称　文芸による名古屋の魅力発信事業　『コトノハなごや』

開催期間　2018（平成30）年6月26日（火）～12月1日（土）

事業趣旨　名古屋の魅力を深掘りする機会を作り、文芸分野、文化、名古屋への愛着を、メディアツールを活用して普及・振興していく。

事業概要　参加体験プログラム（フィールドワークとワークショップ）と作品募集プログラム（公式ウェブサイト利用応募を推奨の作品公募実施）、市長による表彰、文芸を主とした選考委員トーク（コトノハなごやサロン）、広報普及活動

6月	公式ウェブサイト公開、参加申込・作品応募受付開始
7月	フィールドワーク開催（円頓寺・四間道／伊藤家住宅、なごのや）
8月	ワークショップ開催（白壁／文化のみち二葉館、樗木館）
9月	作品応募〆切
10月下旬	一次選考にて入選２０作品の選出、最終選考開始
11月下旬	入選２０作品を公式ウェブサイトで発表
11月下旬	最終選考会、入賞作品決定
12月	コトノハなごやサロン（ナディアパーク／7th cafe） 授賞式、公開講評トーク、企画展を実施 公式ウェブサイト、名古屋市サイトにて入賞作を発表

募集要項　「日常のなごや」を写した課題写真１０枚の中から、写真１枚を選んで、連想する200～800文字までの小説、エッセイ、詩、短歌、俳句など「なごやとわたしの物語」作品を募集。

- 名古屋市内に在住、在勤、在学の方。
- 日本語・自作未発表の作品（応募時点で著作権などの全ての権利が応募者に帰属するもの）。
- 本文が200字以上800字以内のテキストで１作品。１人３作品まで応募可能。なお合作・共作での応募は不可。
- 公式ウェブサイトからの応募を推奨。郵送受付も可。

賞

コトノハなごや 金賞　１作品　賞状と副賞10万円

コトノハなごや 銀賞　２作品　賞状と副賞3万円

コトノハなごや 佳作　若　干　賞状

メディア掲載

中日新聞紙面
2018.08.17 県民版

学生SNS

公募ガイドオンライン
2018.06.26～09.18まで

中日進学ナビ
2018.08.17

朝日新聞ウェブ
2018.07.10

登竜門
2018.06.26～09.18まで

登竜門
2018.08.17

goo
2018.07.10

ウォーカープラス
2018.07.10

広報普及活動

2018.06.18〜06.25	仮公式ウェブサイトにて開催告知編動画配信
2018.06.26	公式ウェブサイト公開 公式SNS開始（Facebook、Twitter、Instagram ※ほぼ毎日更新）
2018.07.03〜07.24	パネル企画展（文化のみち二葉館）
2018.08.27〜09.30	パネル企画展（紀伊國屋書店プライムツリー赤池店）
2018.10.01〜11.30	パネル企画展（ジュンク堂書店ロフト名古屋店）
2018.11.01〜12.01	パネル企画展（ナディアパーク文化情報ひろば）
2018.11.25〜	公式サイトにて審査会とコトノハなごやサロン告知編動画配信

- 市内書店にて郵送済のプログラムパンフレット説明を随時実施
- 名古屋書店員組合様会合にて事業PR
- 各書店様実施の作家によるトークイベント等に参加し公式SNSでリアルタイム掲載
- 名古屋を活動拠点とする作家の方、企業、審査員の方々によるSNSでの相互フォロー、リツイート

制作物

パンフレット［A3カラー 2つ折り］

公式ウェブサイト

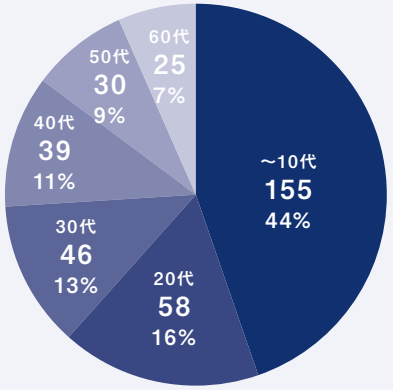
- 12/1サロン用チラシ（A4カラー）
- パネル企画展パネル（A1×6枚、A3×7枚 2セット）
- A1パネル設置台
- 動画（YouTube / 開催予告編、最終選考会とコトノハなごやサロン告知編）

総参加数及び構成年齢等

参加・応募者住所内訳

地域	数
名古屋市	144
岡崎市	10
清須市	6
瀬戸市	6
一宮市	6
その他愛知県	6
豊田市	5
春日井市	5
蒲郡市	4
稲沢市	4
弥富市	3
豊橋市	3
大府市	3
岩倉市	3
安城市	3
日進市	2
長久手市	2
岐阜県	24
三重県	23
静岡県	3
その他	88

応募総数 / 353



選択写真内訳

番号・タイトル	数	%
7 名古屋港水族館	77	21.8
6 名鉄電車	53	15
1 松坂屋とタクシー	39	11
4 大津通栄交差点	31	8.8
10 セントラルパーク / ギャラリー	31	8.8
5 大須観音	29	8.2
3 名古屋市科学館と白川公園	28	7.9
8 名古屋高速 / 都市高速道路	25	7.1
2 堀川とゴンドラ	21	6.0
9 名古屋三越栄店屋上遊園	19	5.4

サイト参照デバイス

<ユーザー数3,344（昨年2,416） 期間2018.6.26-12.10>
総ページビュー数：12,018ビュー（昨年9,169ビュー）

① mobile / 1,734 ユーザー
② desktop / 1,389 ユーザー
③ tablet / 221 ユーザー

応募方法内訳

投稿フォーム（ウェブ）	342 件（96.9%）
郵送	11 件（3.1%）
合計	353 件（100.0%）

2019.3

主　催　文芸による名古屋の魅力発信事業実行委員会
（構成団体：名古屋市、愛知淑徳大学、名古屋市文化振興事業団、文化のみち二葉館）

協　賛　草叢BOOKS新守山店

協　力　Carlova360 ＮＡＧＯＹＡ
紀伊國屋書店プライムツリー赤池店
七五書店
シマウマ書房
ジュンク堂書店名古屋店
ジュンク堂書店名古屋栄店
ジュンク堂書店ロフト名古屋店
正文館書店
ちくさ正文館書店
ＭＡＲＵＺＥＮ名古屋本店
（50音順）

株式会社 ダイナゴン

デザイン　青木奈美（COUPGUT）

ウェブデザイン　石垣嘉洋

校正校閲（入賞作）　櫻本 妙子

文芸による名古屋の魅力発信事業実行委員会　＜コトノハなごや実行委員会＞

460-0008 名古屋市中区栄3-18-1 ナディアパーク8階　公益財団法人名古屋市文化振興事業団内

TEL 052-249-9385　FAX 052-249-9386　http://kotonohanagoya.jp